

乳用子牛は育成早期に放牧可能

福島県農業総合センター 畜産研究所
平成18～19年度農業総合センター試験成績概要

1 部門名

畜産 - 乳用牛 - 畜産ほ育・育成、放牧
分類コード 07-01-40500000

2 担当者

中村 弥

3 要旨

近年増加している遊休農地を有効に活用した放牧育成技術や、哺乳ロボットなど新技術に対応した育成管理技術を確立するため、育成早期の放牧による発育等の検討を行った。

- (1) ホルスタイン種育成牛を用いて放牧を2ヶ月齢で開始し、3ヶ月齢での放牧開始、及び舎飼い慣行と比較した。
- (2) 発育について、2ヶ月齢と3ヶ月齢放牧開始では、体高など各部位でほぼ同様な発育を示し標準発育同等であった。2ヶ月齢と舎飼い慣行では、体重で舎飼い慣行が上回る傾向にあったが、尻長など骨格部分については、ほぼ同様な推移を示した。
- (3) 栄養摂取量は、放牧草の摂取並びに併給飼料(90日齢まで人工乳2kg/日(TDN:72%,CP:18)、以降育成前期飼料2kg/日(TDN:68%,CP:18%))の給与により、育成早期の放牧においてもTDN、CP充足率ともに100%を超えていた。
- (4) 血液成分は、BUNについて舎飼い区に比べ放牧した区が高い傾向にあった。
- (5) 平成18年度2ヶ月齢放牧牛の繁殖成績は、初回授精月齢14.4ヶ月、初回授精時到達体重365kg、受胎までの授精回数1.0回、初産分娩月齢23.6ヶ月(H19当所平均24.0ヶ月)であった。
- (6) 2ヶ月齢放牧牛における5ヶ月齢までの飼料費(試算)は、月間飼料費で当所慣行体系と比べ62.9%であった。
- (7) これらのことから、2ヶ月齢からの放牧においても、放牧草と併給飼料の摂取により標準発育と同等の発育と、その後の発育にも影響がないことが示唆された。

4 その他の資料等

- (1) 渡辺潤ほか(2005)乳用育成牛の放牧による発育効果(第2報)、秋田県畜産試験場研究報告第20号.21～23